

平成27年度 第1回生物多様性推進部会 会議録【要旨抜粋】

【開催日時】 平成27年7月30日（木） 午後2時～午後4時

【開催場所】 西宮市職員会館 大会議室

【出席者】 <専門家> 兵庫県立大学 名誉教授 服部 保 氏
神戸女学院大学 教授 遠藤 知二氏
関西学院大学 教授 佐山 浩 氏
西宮自然保護協会 会長 三宅 隆三氏
NPO 法人こども環境活動支援協会 理事 小川 雅由 氏
<事務局> 産業環境局長 他14名

【主な内容】

1. 部会長、副部会長選出

2. 報告事項

- ・「広田山公園コバノミツバツツジ保全・再生管理計画」の進捗状況について
- ・「甲山グリーンエリア地域連携保全活動計画」の進捗状況について
- ・平成27年度自然調査について
- ・その他（甲子園浜での海浜植物の再生について）

3. 検討事項

「西宮浜総合公園及び御前浜公園基本計画」における海浜保全ゾーン等管理活用方法について

- ・複数の市民団体が御前浜で活動している。目標の共有・連携が重要である。（事務局）
- ・御前浜をスポーツの広場として使いたいという団体は無いのか。例えばビーチバレーの会場を作ってほしいなど。（委員）
 - パブリックコメントにはなかった。行政として景観や自然環境を考える上で、スポーツについては西宮浜側でニーズを拾い、対岸の御前浜公園ではどちらかと言えば自然保護を重視した公園づくりをしたいと考えている。（事務局）
- ・御前浜の土地所有の関係はどうか。（委員）
 - 今現在は、北半分が、私有地で、南側が国有地で兵庫県管理になっている。公園整備後は全域を西宮市が土地所有者から借り受け、法的には都市公園法も適用される。（事務局）
- ・まずは、全く人間の手が入っていない状況でどのような植生が成立しうるのかという図を描いてみるのも良い。様々な意見に対して、方向性をどのようにするのか、委員会の考え方として、生物多様性を重視した海浜のあり方、特に海浜植物群落の多様性というものを、どのように進めて行くかが大切となる。（委員）
- ・六甲山系の歴史から言うと砂防ダムを造り、上流域で砂を留めた段階から、河口域へ砂が供給される量は減っているから、その段階から河口域の環境は変わってきていると思う。土砂供給

もない中、花崗岩の白い砂の景観は自分たちで作らないとできない環境である。実際にこの景観を作ってきた過去からの自然や埋立てを含めた人為的な環境づくりとの兼ね合いの中で議論を進めるべきだ。(委員)

→ここの場合は、人間の手を全く加えないで放置するという手もあるが、その場合、潮風に耐えられる外来雑草が一面を覆うという事になる。(委員)

→(御前浜の自然環境が)最もマイナスな方向へ移行するパターンと、それは嫌だとなった時にどこからどのような段階でどこまで戻していくのか話をしないといけない。(委員)

→ハクセンシオマネキなど、貝やカニや他の水生生物との兼ね合いもある。(委員)

・どのような市民団体の活動があるのか。(委員)

→主に2つの団体が海浜の清掃実施や一般市民向けイベントを展開している。(事務局)

→ここの部会で議論をしたことは、各団体との意見調整を図っておかないと今後の公園管理は難しいだろう。(委員)

→ベースラインシンドロームというものがあり、各人が最初の頃に接した自然に対して思い入れが大きくなってしまって、保全論者にしても自分が子ども頃にそうだったという自然に戻りたいというのに引きずられるという話はある。白砂青松が良い、海浜の植生を残したいというのがあると思うが、この部会の立場としては、海浜という場所が持っている固有の場所として成立しうる生物多様性、環境を維持するというのを目指すのが基本の方針だと思う。大阪湾の中とか、瀬戸内海の中で砂浜の自然海浜はほとんどない状況の中で、そこをどうやって維持するのかが難しい。特に海浜の場合は植物であっても他の浜からの海流からの種子が入ってきて維持されるという物もあって、要するにポツポツと残っている物をどのように維持するのかがすごく大事。自然をできるだけ御前浜が持っているような状態に近づけていくという努力をするという方針をここではっきりさせて、どうやって市民に理解してもらい、連携を図っていくのか考えればよい。(委員)

→先ほど、土砂供給がなくなっていると言ったが、以前に比べるとなくなっているということであり、最近の傾向とすると、急激な豪雨がくると、六甲山が崩れることで土砂が供給される。今、河口域の干潟面積が増えている。このまま放置しておく土砂は詰まって行くので、河口の景観、環境は変わっていく。将来の20年、30年後に予測される環境に向けて、今の環境の中でどういうものを維持するのかを総合的に考えるということをしてほしいとけない。植生だけでなく、香櫨園浜・御前浜・夙川の河口域から構成される全体の環境としてどうするかを考えないとけない。(委員)

・干潟が広がっているという話があったが、干潟は干潟ですごく重要な場所である。そこも含めての話を考えないとけない。(委員)

→生物多様性の観点で言うと県有地であろうが、市有地であろうが広範囲に検討して行く必要がある。兵庫県はきっかけづくりとして、御前浜プロジェクト、海域の浄化のプロジェクトも行ってた。当時、公園緑地課も公園整備して行くので参画していた。今回の機会

を逃してしまうと将来の公園のあり方を考える新たなきっかけを作る事はできないと思う。公園整備をし、西宮市の公園になる、西宮市で生物多様性の戦略を練って、山・川・海で初めての海の戦略を立てていくという流れの中で、市民ニーズを見ながら生物多様性の観点を入れた海岸全体のあり方を考える必要がある。利活用という言葉を使っているが、それは自然環境を利活用した環境学習やイベントであって、花火大会やバーベキュー大会をする利活用ではない。あくまでも自然環境、史跡を踏まえた上での利活用という意味で捉えていただきたい。アクティブにやるものは全て西宮浜だとか他の公園でやっていただくという事。市民団体の皆さんが御前浜のあり方を完全にイメージできている訳ではないと思う。この公園整備計画においては、出来上がった整備後の公園のマネジメントについても進めていきたい。両公園セットでやる部分と西宮浜部会と御前浜部会に分けて各公園の利活用も含めたパークマネジメントをやっていきたい。その前段階として、御前浜を今後どのような風景や環境にしていくのかを、今現在、参加されている市民団体の皆様と共有して公園の整備をして維持管理をしていきたいと考えている。(事務局)

→さきに御前浜に焦点を絞って意見をまとめるということか？(委員)

→生物多様性推進部会の中で議論をしていただきたいのは、御前浜。御前浜公園というのは、夙川の西も東も含めたことなので、そういう風に理解していただきたい。(事務局)

・生物多様性の部会で考えることは、地形がどうかかわるかとか土の供給がどうあるかは別にして、現状の海浜がそのまま維持されるとしたら海浜植物群落で再生させるという方向をきっちり出すのが一番望ましい。白砂青松のゾーン、生物多様性のゾーン等「ここのあるべき姿はこうだ」という方向性を提示するのがよい。(委員)

・先ほどの植生図を見ると、東側と西側ではっきり違う。説明書にもあるが、西側は養浜をしているのか？(委員)

→香櫨園浜は養浜で、御前浜が天然の海浜という認識である。(事務局)

→砂を入れたという意味での養浜ではない。元々から砂浜はあった。(委員)

→甲子園浜は両方ある。テトラポットがあって、砂地があって、テトラポットをどけて親水性を高めるために県が整備して、砂辺を作るために砂を入れたりして今の甲子園浜になっている。そういうところまで香櫨園浜はやっていない。テトラポットをどけて親水性を高めるような工事をしただけ。(委員)

→御前浜では過去、いわゆる川から東側は海水浴場があり、そこには戦争時に切られたマツがあった。ゆえに御前浜にクロマツと砂浜があるというイメージを強く持たれている市民団体の活動がある。(事務局)

・今後の進め方は、基本計画をコンサルタント等に提出するのか。(委員)

→公園整備の基本計画はできているので、今後の御前浜の良さを生かした利活用をテーマにワークショップ的なかたちで市民参加で進めたいと思っている。(事務局)

→その時には生物多様性の観点からの方向性だけは、はっきり決めておかないといけない。

(委員)

→次回の部会で整理したものを提出させていただきたいと思う。(事務局)

→有馬富士公園は市民グループがたくさん入っていて里山など色々分かれて活動しているが、全然考え方が違う。公園を管理する行政側の考え方をしっかり決めたほうが良い。(委員)

→部会の中で、西宮市として自然海浜の環境の今後のあり方を考えていくときに、夙川河口の部分と甲子園浜とを別々で動くわけにはいかない。この部会で議論する時に前提となる場所、両方に共通する西宮の海浜保全という所をおさえ、優先的に御前浜の特徴を考えた整理を行っていく方が良い気がする。(委員)

→夙川の河口部の干潟の問題であるとか、河口部の水の問題だとかを含めて、ここの地域ではどうするかという事である。そう考えると、干潟の部分の多様性から、砂浜の部分の多様性という事で、海浜植物群落を活かしていくという方向になると思う。(委員)

→ここの海浜を本来あるべき海浜植物群落を保有した海岸にするためには、行政の費用とパワーだけでは維持することができない。かなり広いエリアで持続的に海浜植物群落を維持していくため、これだけの規模を現状のマンパワーだけで維持するのは無理だし、いろいろな形でボランティアとして参加してもらうにしても規模的に厳しいのではないかと思うのだがいかがか。(事務局)

→現在も、外来種は全然取りきれないし、管理できていないからそうなる可能性は有るのではないか。(委員)

→日常的に活動しないといけない時と、一時的に人を集めて、イベントとしてやる事で地域の人と連携を図る、例えば昔であったら子ども会が毎年、潮干狩りをやっていたが、その時には400から500人子供が集まって活動していた。今の活動団体の人が全面に出ている風になっているが、本来は、その地域に住んでいる人たちにも関わりを持ってもらわないといけない。そういう人たちと連携し、自治会などで協働で取り組むといった事を考えないといけない。(委員)

→そういう意味で西宮浜には西宮部会、御前浜には御前浜部会を設置し、御前浜部会には地域の方にも入っていただいて、各自主活動ボランティアグループと1対1で行政が連携するのではなく、1つの枠組みを作って、先ほどの既設的なマンパワーを必要とするときは協議会の活動として、日常の管理は各団体が、全体の構想の中で、役割分担する形で日常の管理をするという枠組みができないかなというイメージである。(事務局)

→その日常管理をボランティアと協働で行うというイメージか。(委員)

→今は兵庫県の管轄で、都市公園ではないので積極的に関われない状態であるが、今度は西宮市の都市公園になるので、市が担うべき役割のウェイトは上がってくる。その時に海岸の将来のイメージが無いまま突っ走って行くと危険かなというのを感じている。(事務局)

→街中の公園だと、公園清掃を除草も含めてやっていただいた団体に委託料を支払っていると思うが、そういうイメージはあるのか。(委員)

- それも考えられるし、行政で機械を導入してやらないといけない部分がある。ただ、参画している各種団体、行政が1つの意思、今後のあり方の将来像を見据えた上でやらないと混乱するのではないかと思う。(事務局)
- まだ方向性が無いまま市民に任せれば、それぞれ市民が独自に動き出すからバラバラになってしまう。川西市の場合、ニュータウン開発の際にヘタ地が残ったところにエドヒガンという貴重な桜があった。そのエドヒガンを守るために市民団体が動いて自分たちが守るからと、市に交渉して市が土地を貸して、市民が3ヘクタールから4ヘクタールぐらいを全部管理している。借りてから5年か6年になるが、すごくきれいになって知事が見に来るぐらい立派になっている。そこにはリーダーがいて完全に統一が取れたかたちで1つの団体が管理している。やり方としてはそういうのが一番望ましい。御前浜の場合は色々な団体が入ってきており、目標がはっきりしていないというのが難しいところ。こちらとしては目標をとにかく決めて、それに向けて動くというのしかないと思う。できたら様々な考え方の人が入って、一緒にやっていただくというのが一番望ましいが。(委員)
- この部会の委員間で御前浜の今の自然環境の特性や現状がどこまで今、共通認識を持って議論できるのか。現場も見ることができていないのでは。(委員)
- 先ほど言ったように、原生状態だったら照葉樹林がどこまで入ってきて、前線に海浜植物群落が出てきてという状況がある。それを人間が破壊してクロマツ林ができて、それから現状がある。というのをいくつかパターンを絵に描いてこういうものがあるのだというのを認識してもらおう。市民の人にも重要なことだと思う。白砂青松というと自然植生だと思っている人がほとんどなので。そうでなく、人間が維持しているのだというのを含めて一度その基礎資料を作るという事をしないといけない。いくらでも協力する。(委員)
- 一度、一緒に現地を見てもらい、今回の部会資料を見ながら、今後の可能性をについて意見をまとめないと。(委員)
- 今後のスケジュールはどのような感じか。(委員)
- コーディネーターの方にも入っていただいた上で部会の委員さんと将来像を詰めていくべきだと考えている。今年度で準備をして、来年、再来年度で作り上げるというイメージを持っている。(事務局)
- (ワークショップを実施する前段階で)部会はまだあるのか?(委員)
- ある。その時には景観に詳しい方にも入ってもらおう。市民参加のワークショップでコーディネートを一気にいきなりするのは難しいと思うので、共通認識をこの部会委員とコーディネーターとで調整できたらと考えている状況である。(事務局)

以上